8章

質問 86-87

救いのしるしとしての信仰と悔い改め

質問 86　イエス・キリストへの信仰は、何ですか。

答えⅠ　イエス・キリストへの信仰は、救いの恵みです。それによって私たちは、救いのために、福音において提供されているままに キリストの恵みを受けいれ、寄り頼むのです。

1．キリストへの信仰は、何を語っていますか。

キリストへの信仰とは、私たちの贖罪となられるキリストを持つことを意味します。キリストの義が必要なので、キリストをつかむことを意味します。従って、キリストを信じるためには、先ず、キリストが自分になぜ必要なのかを知らなければなりません（マルコ 2:17）。自分の罪を先ず悟らなければならず、自分の罪に対して神の審判と怒りがあることを知って、それらから免れるためにキリストを必要とするのです。キリストへの信仰は、即効的に起こることではなく、興奮して感情が高調されて起こることでは決してありません。神のみ

ことばを聞き、黙想を通して、自分の霊的状態を悟ることが先にあってこそ、キリストをなぜ信じるのかを知るようになります。更に、救いの信仰は、必ず自分が罪人であることと同時に、キリストとキリストの有益について知識がなくてはなりません。

２．救いの信仰とは 何ですか。

　義とされる救いの信仰は、救いのために、キリストをつかみ、その中に安住することです。救いの信仰を「救いの恵み」とも呼ばれる理由は、神が罪人たちに値なしにくださる賜物だからです（エペソ 2:8）。決して、救いの恵みを受けられる資格があって受けるのではなく、資格がないにも関わらずプレゼントとしてくださるのです。従って、救いの信仰は、自分自身のことは誇らず（Ｉコリント 4:7）、ただキリストだけを高めます（Ｉコリント 1:29）。

３．救いの信仰のために 知識が必要ですか。

　信仰の座所は心です（ロマ 10:10）。信仰を通して理解力が、根本的に変えられ、意思に作用して、キリストをつかむようにさせます（ヘブル 11:13）。従って、救いの信仰において、必ずキリストに対する知識が必要です。これがない中では、救いの信仰とは言えません（Ｉヨハネ 4:6）。この時の知識は、思弁的な知識ではありません。信仰の知識とは、謙遜で（Ｉコリント 8:2）心を変化させられるのです（使徒 16:18）。思弁的な知識でも、キリストに対して知ることもできますが、それは、心に全然変化を与えられるものではなく、救いの信仰と関係のないことです。

４．信仰と救いは、どのような関係を 持っていますか。

　信仰は、神によって賜物として与えられます。この信仰を持って、手を伸ばし、物をつかむようにキリストをつかむのです（詩 68:31）。信仰によってキリ

ストをつかむようになれば（コロサイ 3:11）、キリストに結合されます。キリストに結合されれば、父なる神がキリストの中に用意しておいた救いの有益などが、私たちに流れ入って来ます。キリストの中にある救いの有益などは、罪の赦しを受けられることと、義と認められること、そして、神の家族の一員となることと、私たちが聖とされることなどがあります。救いの恩徳が私たちに適用されて救いを受けるのです。

５．救いとは 何ですか。

救いとは、罪からの救いを意味します（マタイ 1:21）。神の御怒りからの救いを意味します（Ｉテサロニケ 1:10）。一方、救いはこの地において、聖なる生活を生きられることを語ります（Ⅱペテロ 1:4）。従って、この地での救いが始まり、将来、主が栄光のうちに再び来られる時に完成します（黙 3:21）。勿論、救いの恵みを得た民は、天国を受け継ぐことについて確かな理解を持つようになり、それを望みとするのです（エペソ 1:18）。従って、救いの恵みがある者は、この地において、罪と戦いながら聖なる生活を追求します（ヘブル 12:14）。

６．救いの信仰は どのように発生されますか。

神の選んだ民の霊魂の中に信仰を起こさせるのです。神のみことばを聞く中で（ロマ 10:8）、霊的理解力を与えながら（エペソ 1:17‒18）キリストの必要性を知るようになさるのです。これは、聖霊が新しく生まれさせて、心に覚醒が起こされ、霊的理解力が回復され、意思が更新され、キリストをつかむようになさることです（ヨハネ 1:12‒13）。それは、素晴らしく尊い信仰です。なぜなら、誰にでも与えられる恵みではなく、神の選んだ民にだけ与えるからです（Ⅱテサロニケ 2:13, Ｉペテロ 1:2）。従って、救いの信仰を持っている者は、先に救いに対する渇望と、キリストに対する熱心と愛が、大きく起こされるようになっています。

７．キリストへの信仰を、キリストに安住することと語る理由は 何ですか。

キリストは「礎」と啓示されています（イザヤ 28:16）。私たちは救いと永遠の命のために、キリストに対して確信と満足を持って、その礎を頼ることです（詩 116:7）。従って、キリストに安住するとは、キリストに対する教理を知るだけではなく、キリストを絶対的に依存することです（エペソ 1:13, 使徒 10:43)。キリストを信頼し（イザヤ 26:4）、キリストの正しさと完全さに頼って、キリストの中にある救いの有益などを求めることです（詩 45:24）。このようにキリストに安住する理由は、自分のどのような行為によっても、自分を正しくすることはなく、自分を救うこともできないことを徹底して悟ったからです。

８．キリストを全的に受け入れるとは、何を意味しますか。

キリストを全的に受け入れるとは、キリストのすべての職務を自分に適用させることを意味します。キリストは預言者、大祭司、王の職務をこの地に来られて遂行され、天に挙げられた以降は、天の御座の右側に着座しながら続けて働きをなさっておられます。預言者であるキリストから教えを受け、義のために大祭司となられたキリストを必要とし、私たちの聖化のために王となられたキリストを頼るのです（Ｉコリント 1:30）。それゆえ、キリストを、ただ罪の赦しだけのために大祭司として必要とするのは、キリストを全的に受け入れることにはなれないのです。

９．まことの信者たちが持っている 救いの信仰は、みな同じ分量ですか。

まことの信者たちが持っている救いの信仰は、みな同じ分量ではありません。ある者たちは、小さい信仰を持っていて（マタイ 14:31）、他の者たちは神に栄光を帰する強い信仰を持っています（ロマ 4:20）。小さい信仰と強い信仰、みな救いを得る信仰です。しかし、小さい信仰は、世の人とほとんど同じ姿を持

っていたりします。小さい信仰は、恵みの手段を用いることに怠けたり、世と余りにも近づいて生きたりもします。小さい信仰は、キリストの豊かさを経験することができません。反対に強い信仰は、苦難の中でも主の恵みに対する確信の中で生き、キリストの豊かさを経験します（ヨハネ 10:10）。

１０．信仰と望みは、どのような関係を 持っていますか。

信仰によって目に見えない神を見ることができます（ヘブル 11:27）。そして、私たちは、望みとすることを忍耐を持って熱心に待ちます（ロマ 8:25）。信仰は、神の啓示によって目に見えないものを見えるようにさせます。神は正直な方だからです（ヨハネ 6:69）。神の証しは確実だからです。従って、信仰は、目に見えないものを見させ、望みは、それを最後まで耐え忍ばせながら、結局、主がくださる結末を見るようになるのです（ヤコブ 5:11）。

１１．信仰が私たちを どのようにして 義とするのですか。

私たちを義とする信仰は、自分のどのような行為によっても自分を救うことのできないことを認め、律法を守って自分を義とすることができないと認識することを前提とします（ガラテヤ 2:16）。従って、罪の赦しのために、そして神から赦されたいがために、ただキリストだけを頼っている状態です（ピリピ 3:9）。それゆえ、表面的な伝道メッセージを聞き、感情を高ぶらせる説教を聞いて「信じます」と決心するのを、義と認められる信仰だとは言えないのです。自分の霊的無能と不義を徹底して悟って、キリストとキリストの贖いの恵みを知って、それを適用させる状態で、義と認められる信仰が発生されるのです。

１２．救いの信仰でない信仰には、どのようなものがありますか。

神の啓示に同意したり、みことばに啓示された真理に同意したり、啓示されても、感化のない歴史的信仰があります。このような信仰は、悪魔からも発見

され（ヤコブ 2:19）、悪い者たちにもあります（使徒 8:13）。このような信仰が「歴史的信仰」と呼ばれる理由は、聖書の歴史に同意する位だからです。しかし、それに対して関心もなく、自分の霊魂に適用もしないのです（使徒 28:26）。

救いの信仰でない種類として、「一時的な信仰」があります。啓示された真理について同意し、情緒にもある程度の感化があります。しかし、これは、ただ感情だけが影響を受けたことで、その心に変化が起きたりもしていません。従って、しばらくの間はそうするだけで、いずれいなくなってしまいます（マタイ 13:20−21）。その信仰は表面的で、結局、一時的現象で終わってしまうのです。

奇跡の信仰があります。それは、賜物的な信仰であって、救いの信仰ではありません（マルコ 16:17−18）。奇跡の信仰として神の力が現れたりもします（Ⅰコリント 13:2）。これは、例外的な働きの中で現れる機能的なものとして、救いの信仰ではありません。従って、まことの救いの信仰と救いの信仰でないものを区別しなければなりません。唇の告白だけでは分別するのは難しいです。必ずその心と生活に、信仰の効果があるのかを調べることです。勿論、使徒パウロが私たち自ら自分の救いについて点検しなさいと宣べているので、先ず自分の信仰に対して点検すべきです（Ⅱコリント 13:5）。

質問 87.　命に至る悔い改めとは、何ですか。

答えⅠ　命に至る悔い改めも、救いの恵みです。罪人は自分の罪を本当に自覚し キリストにある神の憐れみを理解して、自分の罪を憎み悲しみながら、罪から神へと立ち帰り、新しい従順を最高の目的として努力するようになることです

１．キリストへの信仰と 命に至る悔い改めとは、どのように区別できますか。

キリストへの信仰とは、ただキリストの中に贖いの恵みがあって、その恵みが必要なのでキリストをつかむことを意味します。命に至る悔い改めとは、自分の罪を徹底して認め、罪に対して憎み、罪と戦う性質が形成されたことを意味します（Ⅱコリント 7:11）。神は、キリストへの信仰と、命に至る悔い改めを求めますが、それが条件となって救いの恵みを施すということです。しかし、このようなことは、私たち自身から出て来るのではなりません。聖霊が私たちの内面で御業を行って起こることです。神は罪人たちに信仰と悔い改めを求めますが、それは聖霊の御業によって賜物として受けられます。従って、救いは、決して私たちから出て来るのではなく、神のプレゼントです（エペソ 2:8–9）。

２．命に至る悔い改めという理由は、何ですか。

救いの恵みは、信仰と悔い改めとで構成されます。信仰には、救いに至るものと、救いに至らないものがあるように、悔い改めにも、救いに至る、あるいは命に至る悔い改めがあるように、そうでない場合があるからです。使徒パウロは、信仰と行いが一致していない信者を責めていて、責める中で悔い改める者たちが起こされました。パウロは、彼らの悔い改めが、まことの悔い改めなのか、そうでなく、偽りの悔い改めなのかを明確に分別しながら、まことの悔い改めを「救いに至る悔い改め」と呼びました（Ⅱコリント 7:10）。

３．命に至る悔い改めの 第一の構成要素は、何ですか。

命に至る悔い改めは、嘘の悔い改めと区別されて明確な要素を持っています。その第一の構成要素は、自分の罪をまことに悟って心が低くされます。自分の罪を自覚するとは、自分の罪は、神に敵対して犯した罪であると認めることで

す（詩 51:4）。そして、自分の罪が神の呪いを受けるのに充分であると知ることです（エゼキエル 18:30−32）。自分の罪を悟りながら、その霊は低くなります。まるで刃物で心に割礼を行うようなことです。この時の心は、まるで岩が粉々になるような痛恨の心を持つようになり（マタイ 5:4）、その霊は砕かれて、神が用意した恵みを受けられる状態になります。このように罪を悟るのは、内的なことにも関わらず、外的にも現れたりもします（エゼキエル 36:31）。

4．命に至る悔い改めの 第二の構成要素は、何ですか。

キリストの中にある神の慈悲を悟るのです。これは信仰を通して悟ることですが（詩 13:5）、自分の罪によって低くされた罪人は、神の赦しの恵みを求めるようになります。神から赦しを受けなければ、自分の罪による神の厳重な審判があるのを知っているからです。このように神の恵みを求める時、聖霊を通してキリストの中に、神が罪の赦しを用意して置いたことを知るようになります。それで、罪人は、キリストの中にある神の慈悲を悟るようになります（ロマ 3:26）。このような悟りの中から悔い改めが出るようになるので、悔い改めの第二の構成要素となります（ゼカリヤ 12:10）。

5．命に至る悔い改めの 第三の構成要素は、何ですか。

命に至る悔い改めの第三の構成要素は、自分の罪に対して憎み、悲しむようになることです（詩 38:18）。それは、聖霊の御業によって心の内面から起きます。罪に対して悲しむのは、罪は神に敵対し侮辱したことであると悟って（ヨブ 40:4−5）、自分の罪に対して嫌うようになります（イザヤ 6:5）。それによって、心には罪に対して憎む性質が形成されます。これは宇宙的なこととして、すべての罪について憎むようになります（詩 119:104）。そして、自分がすでに知っている罪に対しても憎みます（詩 101:3）。これは、心に変化が起きたこと

の証拠であり（ゼカリヤ 12:10）、これ以上、罪の中に留まらずに罪から確かに離れるようになります（ヨブ 42:5−6，エゼキエル 36:31）。

6．命に至る悔い改めの 第四の構成要素は、何ですか。

罪から離れることです。もし、自分の罪を自覚しながら、その罪から離れないなら悔い改めではありません。パロ王は、モーセの前で自分の罪を認めました（出 9:27）。しかし、罪から離れませんでした（出 9:34）。ヘロデは、自分の罪を確かに知っていて、バプテスマ・ヨハネからの叱責を甘んじて受けました（マルコ 6:20）。それにも関わらず、ヘロデは自分の罪から離れずに、バプテスマ・ヨハネを殺したのです（マルコ 6:27）。ペリクス総督も、やはり自分の罪を知っていました。しかし、その罪から離れることを拒否しました（使徒 24:27）。

従って、罪を悟るのと罪から離れることは、別個の問題です。罪から離れるとは、罪を脱ぎ捨てた証拠であり（Ⅱコリント 7:11，エゼキエル 14:6）、それ以上、罪の中に生きられないという告白なのです。罪から立ち返った証拠は、罪に対する誘惑を受けた時、抵抗する姿として現われ（詩 18:23）、対話と行動からも、神と人に対して良心の責められることのないように労します（使徒 24:16）。

7．命に至る悔い改めの 第五の構成要素は、何ですか。

神に立ち返ります（ホセア 6:1）。罪から離れ、神に立ち返ったようですが、神に行かない場合があります。彼らは神をあざける者たちです（ホセア 7:16）。従って、神に立ち返ることが必ずあってこそ、命に至る悔い改めに該当されます（エレミヤ 31:19）。罪人が神に立ち返るとは、神に降参したしるしです。神の前に自分のことを謙遜に告白します（Ⅰヨハネ 1:9）。これは、聖霊の御業によって可能なことですが、聖霊が罪人の意思を更新させるので、神に立ち返る

ことができるのです（ホセア 2:7）。

８．命に至る悔い改めの 第六の構成要素は、何ですか。

罪人は神に立ち返りながら、神に対する愛のしるしを示します。そして、神に従順するのを最高の目的とし、新しい従順の生き方をするために努力します。神に対する義務を果たすために努力します（詩 119:106）。このような努力がなければ、まことの悔い改めではありません（マタイ 21:30）。神の栄光が、彼らにとって生きる究極的な目標となります（Ｉコリント 10:31）。このようなことを「福音の服従」と呼びますが、これが必要な理由は、まだ、私たちの心に腐敗性が残っているからです。肉の腐敗性は、私たちを罪の中に留まるようにさせます。従って、罪を犯さない、より積極的な方法は神に服従することです（ローマ 6:11）。

９．律法的悔い改めと 福音的悔い改めとは、どのように異なりますか。

律法的悔い改めは、神の怒りに対して恐れから悔い改めます（マタイ 27:3，5–6）。しかし、福音的悔い改めは、キリストの中にある神の慈悲深さを悟って悔い改めるのです（詩 130:4）。律法的悔い改めは、神の怒りに対する恐れがなくなれば、再び罪に戻って行きます。罪に対する結果だけを悟ったからです。カインは、罪を犯した後で神の審判宣告を恐れました（創 4:13）。しかし、彼は悔い改めませんでした（創 4:16）。パロ王がした悔い改めも、律法的な悔い改めでした（出 9:27）。サウルは、サムエル預言者を通して罪を悟って審判を恐れる中で悔い改めたのですが、その悔い改めは律法的な悔い改めでした（Ｉサムエル 15:30）。

律法的な悔い改めは、再び罪に戻る悔い改めであり、一時的悔い改めです。しかし、福音的悔い改めは、罪から離れるだけでなく、神に立ち返り、従順の生活を生きるのです。罪悪の性質を悟っただけではなく、罪が、神の聖なる性

質に反することだと認識したからです（ルカ 15:21）。

１０．パウロは 命に至る悔い改めの証拠を どのように語っていますか。

使徒パウロは、第二コリント 7 章 11 節で、七つの悔い改めの証拠に言及しました。「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである。」（Ⅱコリント 7:11）「熱情＝切実」とは、霊的注意を払うこと（ルカ 10:42）、「弁明」とは、自分が義とされた根拠を考えるのです（イザヤ 45:24）。「義憤」とは、罪に対して憎んでいることを意味し（詩 51:4）、「恐れ」とは、自分の罪に対して神の御怒りがどれほど厳しく恐ろしいのかを悟る心です（創 39:9）。「愛慕＝慕う心」とは、神の律法通りに生きようと努力する心です（詩 27:4）。「熱意＝熱心」は、神の栄光に対する熱心です（詩 137:5−6）。「処罰＝断行」とは、罪を犯すまいとして、肉を抑制させる意味です（ロマ 7:24）。

１１．悔い改めは命令ですが、私たち自身の力によって できるのでしょうか。

聖書で神は、私たちに悔い改めなさいと命令をします（使徒 17:30）。しかし、この悔い改めは、私たちの意思と力によってできるものではありません。更に、私たちが悔い改めたからと言って、それが、条件となって罪の赦しを受けるのでもありません。神が恵みをくださってこそ悔い改められるからです（エレミヤ 31:18）。悔い改めのために聖霊が、私たちの心に罪を悟らせてくださる覚醒があるべきです（ゼカリヤ 12:10）。従って、神が悔い改めなさいと命令なさるのは、悔い改めのために、神に恵みを求めなさいということです（ゼカリヤ 3:6）。ただ自分の考えによって悔い改めたとしても、表面的な悔い改めになります。

必ず、神のみことばがあってこそ、悔い改められます（ホセア 14:2）。従って、命に至る悔い改めをする者たちは、自分の意思と力によってしたことではなく、ただ神の恵みによって悔い改められたことを認めます（使徒 5:31，11:18，Ⅱテモテ 2:25）。

義と認められる　救いの信仰は、

救いのために　キリストをつかみ　その中に安住することです。

救いの信仰が「救いの恵み」とも呼ばれる　理由は、

神が罪人たちに　値なしにくださる　プレゼントだからです。

救いの恵みを　受けられる資格があって　受けられることは　決してなく、

資格がないにも関わらず、

プレゼントとしてくださるのです。

従って、救いの信仰は　自分自身について　誇るのではなく、

ただキリストだけを高めます。